

Title	ポストドクター等の雇用条件と研究活動の関係性について
Author(s)	襦岩, 晶; 三須, 敏幸
Citation	年次学術大会講演要旨集, 23: 1042-1045
Issue Date	2008-10-12
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/7742
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

ポストドクター等の雇用条件と研究活動の関係性について

○裴岩晶，三須敏幸（文部科学省・科学技術政策研究所）

1 はじめに

文部科学省科学技術政策研究所は、我が国のポストドクター等の実態を把握するため、「大学・公的研究機関等におけるポストドクター等の雇用状況調査」ではポストドクター等の延べ人数を、「ポストドクター進路動向 8 機関調査」ではポストドクター等を経験した後の進路動向を調べている。ただし、これらの調査では、ポストドクター等の研究環境や経済的支援を含めた「生活の実態」や、これらの人々の「進路選択要因」にまで踏み込んではいなかった。そこで、ポストドクター等の「生活の実態」と「進路選択要因」を明らかにするため、2007 年 11 月から 2008 年 1 月にかけて「ポストドクター等の研究活動・生活意識調査」が実施された。

本報告は、この調査の「生活の実態」に関する報告書に基づいて、ポストドクター等の雇用条件（特に給与）が性別や研究分野によって異なること、その一方で、ポストドクター等自身の研究業績（特に査読付論文数と、その内のファーストオーサー数）については、性別や研究分野による違いがほとんど見られないことを明らかにし、我が国におけるポストドクター制度の在り方を考察する。

2 調査方法

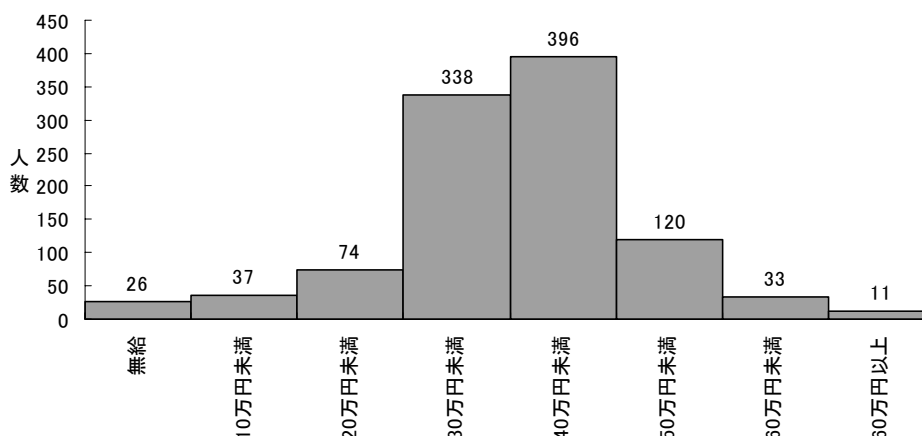
「ポストドクター等の研究活動・生活意識調査」は、日本国内に存在する大学、公的研究機関、科学研究費の申請を行っている民間の研究機関に対して、所属するポストドクター等の性別と研究分野の比率に比例させて、全体の 1 割を調査対象者として抽出してもらうという「割当て法」を採用している。また、実際の回答においては、調査対象者本人が Web 上の調査票に直接回答を行っている。有効回答者数は 1035 名、回答率は 66%となっている。

3 ポストドクター等の雇用条件

「ポストドクター等の研究活動・生活意識調査」によって初めて明らかにされたこととして、我が国におけるポストドクター等の常勤比率が約 50%であること、雇用契約上の週当たりの勤務時間の平均が約 33 時間であることなどがあげられるが、本報告では、ポストドクター等の給与に着目する。

「ポストドクター等の研究活動・生活意識調査」では、月ごとの給与を「無給、5 万円未満、10 万円未満……100 万円以上」と 5 万円間隔で調べている。その結果が、図 1 である。

図 1：ポストドクター等としての給与



また、平均給与額を求めるため、無給を「0 円」とし、各給与クラスは中央値をそのクラスの代表値として計算が行われている（10 万円未満であれば 7 万 5 千円とする）。その結果と、厚生労働省「賃金構造基本統計調査」における我が国の平均的な月給の値を表 1 に示す。

表 1：月あたりの平均給与

(単位:千円)		
項目	ポストドクター等の の平均値	賃金構造 基本統計調査
全体(1035 名)	306	331
年齢	30 歳未満(195 名)	280
	30-34 歳(556 名)	304
	35-39 歳(215 名)	329
	40 歳以上(69 名)	325
		-

有効回答者全体のポストドクター等としての給与の平均額は、約 306,000 円である。この値は、「賃金構造基本統計調査」での我が国全体の平均月給 330,900 円よりも下回っており、さらに年齢別に比較すると 30 歳未満（「賃金構造基本統計調査」では 25-29 歳）までは我が国全体の平均給与を上回るが、30 歳代以降は我が国の平均を下回っている。計算方法や年齢分布が異なる点に注意が必要であるが、ポストドクター等の給与は、我が国の平均から見て、決して多いものではないことがわかる。

表 2：ポストドクター等の属性別平均給与

(単位:千円)		
項目		平均値
全体(1035 名)		306
性別	男性(780 名)	314
	女性(255 名)	282
研究 分野	人社(121 名)	213
	理学(397 名)	329
	工学(223 名)	330
	農学(126 名)	287
	保健(153 名)	307
	その他(15 名)	260

次に、男女別、研究分野別にポストドクター等の平均給与額を見ていく（表 2）。男女別に見ると、男性の平均は約 314,000 円、女性の平均は約 282,000 円であり、3 万円以上の開きが存在する。これは、女性の非常勤比率が高い（常勤と非常勤では、ポストドクター等の平均給与に 8 万円以上の開きがある）ことなども影響しているが、常勤の者だけを取り出して男女の平均給与を比較した場合でも、男性が約 354,000 円、女性が約 333,000 円であり、2 万円以上の差が生まれている。

研究分野別では、最も高い工学系で約 330,000 円、次いで理学系が約 329,000 円であるのに対して、最も低い人社系では約 213,000 円と 10 万円以上の差が見られる。週当たりの雇用契約上の勤務時間を比べると、工学系の平均が 34 時間、人社系が 29 時間となっており、これが給与に影響しているとも取れるが、農学系は 33 時間であるのに工学系に対して 4 万円以上の給与差があり、この違いは勤務時間だけの要因とはいえない。

雇用条件、特に給与においては、ポストドクター等は決して恵まれた存在ではなく、また、同じポストドクター等と見なされている人々でも、性別や研究分野によって待遇に差が生まれていることが確認できる。

3 ポストドクター等の研究活動

「ポストドクター等の研究活動・生活意識調査」では、ポストドクター等の研究活動を把握するため、研究環境、業務内容、ポストドクター等自身の研究業績などを調べている。研究環境としては、専用の

デスクを用意されている者が 96%であるのに対して、専用 PC では 64%にとどまっていること、業務内容の中身としては、有効回答者を平均すると「自分の主たる研究」が 70%、「自分の研究以外の研究・教育業務」が 17%、「その他の業務（雑務）」が 13%であることなどが明らかになっている。本報告では、研究活動の成果としてのポストドクター等自身の研究業績に注目する。もちろん、これらの研究業績のみで、ポストドクター等の研究活動を測るべきではないが、これらの人々の活動やこれらの人々の能力を知る上での重要な指標の一つとして、研究業績を用いたい。

ポストドクター等自身の研究業績については、ポストドクター等としての期間中に発表した査読付論文本数（その内のファーストオーサー数）、紀要論文本数（その内のファーストオーサー数）、学会発表回数（その内のファーストオーサー数）、著作冊数、訳書冊数、特許申請件数が調べられている。これらの数値は、ポストドクター等としての期間の長さによって左右されるため、その期間でポストドクター等自身の業績を割った値、つまり擬似的に求められる 1 年あたりの研究業績の推計値が計算されている。本報告では、この推計値を用いて議論を進める。表 3 は、査読付論文本数、その内のファーストオーサー数、紀要論文数、学会発表回数に関する 1 年あたりの推計値を主な属性別に表したものである。

表 3：ポストドクター等の研究業績（1 年あたりの推計値）

項目		内ファースト オーサー		査読付論文	紀要論文	学会発表
	全体(1035 名)	1.60	0.74	0.34	3.37	
性別	男性(780 名)	1.71	0.78	0.35	3.62	
	女性(255 名)	1.26	0.62	0.29	2.60	
研究分野	人 社(121 名)	<u>0.87</u>	0.73	0.61	1.94	
	理 学(397 名)	1.57	0.69	0.34	3.07	
	工 学(223 名)	2.45	1.08	0.35	5.14	
	農 学(126 名)	1.39	0.64	0.28	3.30	
	保健(153 名)	1.25	0.48	0.14	2.81	
	その他(15 名)	1.21	0.70	0.32	2.72	
主要財源 (代表的なもの)	21 世紀 COE(112 名)	1.62	0.83	0.31	4.15	
	PD(87 名)	2.00	0.96	0.45	4.32	
	その他フェロー(19 名)	1.58	0.87	0.28	5.30	
	雇用関係なし(27 名)	<u>1.09</u>	0.81	0.70	1.81	
	運営費交付金等(232 名)	1.75	0.71	0.38	3.38	

ポストドクター等の 1 年当たりの研究業績の推計値は、査読付論文本数で平均 1.6 本（内、ファーストオーサー数で平均 0.7）、紀要論文本数で平均 0.3 本、学会発表回数で平均 3.4 回となっている。ポストドクター等の源氏の雇用財源別に業績を見ると、日本学術振興会の特別研究員（表中の「PD」）や「その他フェロー」といったフェローシップ型の経済支援を受けている者が、他の雇用財源に比べて業績が多くなっている（ただし、あくまでも現在の雇用財源に関しては、ポストドクター等としての期間中に別の異なる財源で雇用されていた可能性があることにも注意が必要である）。

性別では、表中の全ての項目で、女性よりも男性の方がわずかに多くなっている。ただし、査読付論文本数のファーストオーサー数で見るとその差はあまり大きくない。研究分野で比較すると、工学系の査読付論文本数が最も多く（平均 2.5 本）、人 社系が最も少ない（平均 0.9 本）。ただしこちらも、ファーストオーサー本数では、人 社系が 2 番目に多く、工学系との差もかなり縮まっている。

ここでさらに、男女別に研究分野毎の研究業績を比較する（表 4）。人 社系、工学系をみると、女性の方が男性よりも査読付論文のファーストオーサー数が勝っており、上述の男女の差は、女性に人 社系が多いためであると推測される。

ポストドクター等の研究業績が研究分野によって異なっているのは、共同研究の規模（参加する研究者数等）、論文や学会発表の形式の違い（単著が多いか、共著が多いか）等が影響しているようであり、査読付論文のファーストオーサー数で比較した場合、性別、研究分野といった属性による違いはそれほど大きくないことがわかる。

表 4：性別・研究分野別の研究業績（1 年あたりの推計値）

性別	研究分野	内ファースト		紀要論文	学会発表
		査読付論文	オーサー		
男性	人社(79 名)	0.78	0.67	0.62	1.81
	理学(315 名)	1.67	0.75	0.38	3.29
	工学(193 名)	2.47	1.08	0.33	5.26
	農学(89 名)	1.44	0.66	0.31	3.52
	保健(98 名)	1.40	0.53	0.17	3.02
	その他(6 名)	1.17	0.49	0.02	3.11
女性	人社(42 名)	1.03	0.85	0.60	2.20
	理学(82 名)	1.18	0.46	0.19	2.23
	工学(30 名)	2.31	1.12	0.54	4.33
	農学(37 名)	1.25	0.59	0.22	2.77
	保健(55 名)	0.99	0.39	0.08	2.42
	その他(9 名)	1.23	0.84	0.52	2.45

4 おわりに

ポストドクター等の雇用条件、特にポストドクター等としての給与額と、研究活動の成果としてのポストドクター等自身の研究業績を見てきたが、給与額には性別や研究分野によって違いが見られたが、研究業績にはこれらの属性別の違いがあまり見出せないことがわかった。「ポストドクター等の研究活動・生活意識調査」では、さまざまな属性間でポストドクター等の待遇の違いを確認できるが、その差が生まれる理由をポストドクター等の研究活動や研究業績から説明することができなかった。

我が国の研究・開発分野において、ポストドクター制度の果たすべき役割とは「若手研究者の自立支援」であるが、同時に、研究・開発に必要とされる「人材の供給」という機能をも有している。これらの目的や機能は確かに重要であるが、「同じポストドクターでも雇用条件が異なるケース」があることも事実である。

我が国のポストドクター制度が「若手研究者の自立支援」としても、研究・開発のための「人材の供給」としても存続し、機能し続けるためには、ポストドクター等の雇用条件や研究環境をさらに改善し、任期終了後のキャリア開発などの支援を充実させていく必要があるのではないだろうか。

参考文献

厚生労働省「賃金構造基本統計調査（平成 18 年）」

(http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/kouhyo/indexkr_4_9_1.html)。

文部科学省科学技術政策研究所、『ポストドクター進路動向 8 機関調査』、2007。

文部科学省科学技術政策研究所、『大学・公的研究機関等におけるポストドクター等の雇用状況調査（2006 年度実績）』、2008。

文部科学省科学技術政策研究所、『ポストドクター等の研究活動及び生活実態に関する分析』、2008。

文部科学省科学技術政策研究所、『ポストドクターのキャリア選択に関する分析』、2008。